

## 「筑波学院大学紀要」の創刊に当たって

学長 門 脇 厚 司

2005年4月、東京家政学院大学筑波女子大学は、同短期大学部と統合し、併せて男子学生にも門戸を開き、男女共学の四年制大学「筑波学院大学」として新しくスタートしました。

東京家政学院筑波女子大学は、1996年度末に短期大学部と共同するかたちで「東京家政学院大学筑波女子大学紀要」の第1集を発行、以後、毎年度末に発行を続けてきましたが、2004年度末発行の第9集をもって終刊となりました。代わって、この度刊行することにしたのが「筑波学院大学紀要」です。創刊第1号をこのように発刊できたことを教職員とともに慶びたいと思います。

内容はといえば、原著論文が12本、研究ノートが5本、調査報告1本、合計18本になりました。創刊に当たり、表紙も従来のを踏襲せず新しい体裁を採用しました。全体としてみれば、創刊第1号としてまずまずの出来上がりになったといっているように思います。

予想以上に早く進んだ少子化の結果、入学定員を満たすことが出来ない大学が増えてきています。勢い、大学への入学は容易になっており、大学生の学力が一様に低下していると言われます。こうした状況を反映し、大学も急速に様変わりしつつありますが、とりわけ大きな変化は教育重視の傾向が強まってきていることです。これまでは、どちらかという、大学は教育より研究が主という考え方がありましたが、このところ、教育へのウエイトが大きくなってきています。

従来、大学が発行する紀要はといえば、教員が研究者として研究してきた研究成果を論文にし発表する研究誌の趣が強く、またそれでよいという考えが支配的でした。しかし、この度刊行された「筑波学院大学紀要」は従来紀要の性格を踏襲するだけのものであってほしくはないと考えています。残念ながら、本学には、まだ、他大学に続々創設されている「大学教育実践センター」といった施設はありません。だからといって、本学での教育を改革し改善しなくていいということにはなりません。むしろ、他大学に先駆けて、教育内容や教育方法の改革ないし改善を進めていってほしいと望んでいますし、そうしていかなければならないとも考えています。

そう考える学長としては、この紀要に掲載される論文の多くが、自ら工夫し行った新しい教育実践に関わるアクション・リサーチの成果であることを期待しています。イギリスの放送大学のピーター・ウッズ教授は、新しく開発された教授法や教材をcritical eventsと呼んでいます。本紀要がそうした誇らしいcritical eventsで多くのページが埋められ、他大学から注目され、引き合いの多い紀要になることを願うものです。